

令和7年度第1回 オーテピア高知図書館サービス計画推進委員会 議事概要

1 日時:令和7年6月17日(火) 14:00～16:00

2 場所:オーテピア 4階 研修室

3 出席者:

[委員]加藤委員長、篠森副委員長、齋藤委員、常世田委員

[オーテピア高知図書館]杉本高知県立図書館長、小新高知市立市民図書館長 ほか

4 議事次第

(1) 開会

(2) 議事

①オーテピア高知図書館サービス計画の取組状況について

[資料1～3、5]

②次期サービス計画の策定について

[資料4]

③その他

【委員】

議事1について、委員の皆様のご意見をいただきたい。

【委員】

今日準備してきた資料の説明をしたいのと、資料1の1ページについて1つ質問したい。ウェブ・サイトのページビューが200万回増えている。これには何か理由があるか。とてもよいことだと思うので、何かを実践したらこういう数字に上がったという理由があれば共有しておきたい。

【事務局】

いくつか理由があると思うが、一番はスマートフォンで使うアプリの利用が増え、アプリからウェブ・サイトのお知らせに飛ぶことが増えたのが大きな要因ではないかと分析している。

【委員】

こういった形で、離れた人にも見てもらうことができているというのは、とてもよいことだと思う。

今日は都道府県立図書館の資料費の推移が分かる資料を準備した。今年、同志社大学で都道府県立図書館の職員向けに講座を行うことになり、講座で使う1996年、2002年、2024年の資料費の推移の資料をお配りした。日本図書館協会の資料の数字を足し算すると、1996年が都道府県立図書館の資料費のピーク。47都道府県全部を合計すると、42億7,000万円

になり結構な数字。平均すると9,100万円程度が、当時の都道府県立図書館の資料費となる。2002年は私が館長になった年で、鳥取はここから改革し始めたので、それをメルクマールとして突っ込んでみた。2002年はある程度減ってきていて、合計が36億5,000万円、平均が7,700万円余り。昨年、2024年の予算になると合計が26億9,000万円で、最初の1996年と比べると、格段に減っていることがご理解いただけると思う。この状況においても、鳥取県立の資料費が1億円あることがある意味当たり前の感覚になっている職員がいる気がするが、決してそうではない。2024年に至っては、1億円を超えている県は5つしかない。千葉は図書館を新設するということで入っているが、経常的な例で言うと、高知が2番目、鳥取が3番目。

ちなみに財政力指数が高い順から並べると、ワーストワンが島根県、ワーストツーが高知県、ワーストスリーが鳥取県。本当に貧乏な県2つが1億円の資料費を維持している。繰り返しになるが、これは当たり前ではなく、それぞれの図書館がかなり努力をしているということ。どういう努力をしているか。私は1996年頃から県立が失敗したポイントが大きく2つあると思っている。1つはお役立ち感。地域振興や様々なものをもっとよくしようということに図書館が関わっていくという姿勢が他の都道府県では弱かったように思っている。感覚的に言うと、読書の方に肩入れする、あるいは貸出数にこだわってしまうということ。その後どうなるかというと、合併が始まる。合併が始まると都道府県立図書館のサービス対象となる自治体の数が減ってきて、弱い自治体の数も減ってくる。要は、手がかかるところが少なくなってくるので、今までよりも楽になったよねと財政から言われる。

一方で、鳥取県は、そうなることをある程度見越して様々な展開をしてきた。高知も合築して新しい図書館ができるという議論の最中から、地域にとってもっと役立つ図書館になることを念頭において様々な事業展開をしてきた。そのことが、この数字を支えている大きな要素ではないかと思った。今後を考えると、鳥取も高知も貧乏な県なので、だんだん予算規模は縮んでくるが、図書館をそれと同じスピードで縮めてしまえば、非常にまずい。図書館をどう捉えるかになるが、図書館を本を貸すところ、あるいは教育機関として捉えているのだったら、同じように縮んでいくと思う。図書館が今まで以上に様々な行政機関や団体と連携し、その協力の中で彼らが縮んだ部分の影響をできるだけ少なくし、県民・市民の皆さんに今までとは違う方法でのサービスや情報の提供に最善を尽くすスタンスを持つことができれば、多少縮むのはやむを得ないかもしれないが、他よりも縮み方を抑え、今まで以上に行政サイドに図書館を使ってもらう方向に持っていけるのではないかな。進捗管理シートなどの資料の中では、今後の方向性について様々な検討がなされ、また、今の状況を分析し、どういう方向に向かっていくかをこれからまた考えようということが、はっきり見えていると思う。1億円が今の日本では飛び抜けたような数字になっている。元々それぐらいあって、県立がやるのがある意味当たり前だった時代がある。それと、特に高知や鳥取だと、高い本や高い情報を買って提供できるところは県立図書館の他にない。例えば、大学でもそうだが、鳥取には鳥取大学があって1億何千万円の資料費を持っているといっても、そのうち1億2、3千万円位は、アメリカの某社がガバナーと持っていて、手元には3,000万円位しか残らず、その中でさらに研究室が本を買ってと学生向けの本は買えないというのが現状。高知でも多分、各大学の状況は同じだと思う。大学で

も様々な書籍や雑誌などが必要になり、こういう本がぜひほしいと言われたときに、県立が分かりました、それはうちで準備すると言えるか言えないか。そこで言える図書館であってほしいし、大学やいろいろな団体、専門的な機関のニーズを県立がきちんと受けとめて、必要なものは購入して提供する姿勢をずっと持ち続けるオーテピアであってほしい。

【委員】

私は市立図書館出身なので、今日の資料費の推移の資料に都道府県立図書館の所在地の自治体の市立図書館の予算をかぶせると、また面白い結果が出るのではないかと先ほどの資料を見た。

頑張っって予算を確保している都道府県立図書館の所在地の住民は、都道府県立図書館とその当該自治体である市立図書館のサービスを両方受けられる。私が審議会の委員をしているいくつかの自治体で最近、新しい図書館やサービスについて議論している。都道府県立図書館と市立図書館が両方ある自治体について、いくつかは話題になって分析もしている。

高知の場合は、県立と市立が一緒になっていることで、その比較の分析を進めなければいけないという話を今までもしてきた。県立図書館と市立図書館の貸出冊数を足した数は出るが、県立図書館は市外の利用者もいるので、厳密に言うと、県立図書館と市立図書館で当該自治体の住民だけがどのくらい利用しているかという分析を本当はしなければいけない。

オーテピアは県市合築ということで、県立図書館のサービスに光が当たりがちだが、私はずっと、高知市民図書館、高知市内のサービスの向上がなければ意味がないという話をきて、その分析をもう少し進めなければいけないと思っている。その分析の手法を皆さんと一緒に開発していく必要があると思って発言しているので、ぜひ続けてやっていかなければいけないと思っている。

今日のサービス計画について言うと1つ、前回も話したが、業務の見直しをそろそろしないといけない。業務はミッションと言ってよいと思う。今回、3期の計画策定でいくつかポイントが挙がってきていて、これがミッションになると思う。かなり新しいミッションが提案されているので、このミッションを達成するために業務の見直しをしなければいけない。その場合、組織の見直しとセットでやらないと意味がない。これも以前、話したと思うが、日本の組織のあり方は軍隊型のいわゆる樹状型。大きな組織から小さな組織に分かれていく組織のあり方しか日本人の頭の中にはない。本来組織のあり方はもっと多様なのに、日本は企業も行政もほとんどこの軍隊型の組織しか採ってない。そうすると、どんどん蛸壺になっていってしまうので、私は、従来型の組織のあり方は図書館には向いていないと思っている。

実際私は、浦安市立図書館の館長だったとき、法的にも、行政の成り立ちから言っても、軍隊型の組織、ラインを作らざるを得ないことは仕方がないので、課長、課長補佐、係長などの人事管理だけはそのラインでやり、図書館の専門的な業務については、全く別のグループ制を立ち上げて、グループのチーフはその業務に対する知識、経験、やる気で、年齢と関係なくチーフにする形を人事とも相談して実験的に行った。オーテピアの場合も一部分グループ制を採られているが、私の経験で言うと、自分の所属がある限りは、兼務はあくまでもお手伝いという意識になってしまう。存在が意識を規定するという有名な話がある。そもそも、自分の所属が本

来的であって、それ以外の兼務でお手伝いに行くのではグループ制は成立しない。違うグループに全く同じ重さで所属する形のグループ制にしないと意識は変わらない。グループ制のメリットは、忙しいところと忙しくないところが均一化できること。従来の組織だと、絶対に忙しいところと忙しくないところが生まれて蛸壺になってしまい、他の業務のことには興味がわかない。このことは、この委員会でも何回か出てきている。懇親会の席で本音が出て、何人かの方からその話は聞いたし、具体的に課題としても提案されたことがある。オーテピアぐらいの組織になってくると、どうしても蛸壺になって、自分の業務以外は興味がなくなってくるのは仕方がない。それがミッション達成のための疎外要因になっていくということがそろそろ起き始めているのではないか。

日本中のほとんどの図書館は軍隊型の組織でやっている。これは必ずしも効率がよいとは限らないし、サービスに結びつかない。つまり、新しいミッションや業務が出てきたときに、従来型の組織に割り振ることになるが、これは本来おかしい。ミッションを達成するために組織があるのに、組織の方にミッションや仕事を寄せてしまうことが当たり前に行われている。変化が激しいこの時代に、大きい民間企業の場合は、ミッションや業務に合わせて毎年組織の手入れ、入れ替えを当たり前に行っている。行政はそこが非常に遅れている。

図書館の場合は、実際に似たような内容の1つの業務を違う部署で行っていたり、それは私のところの仕事ではないという谷間が生まれてしまったりする。だから、第3期を考え、新しいミッションが出てきたときに、そのミッションを達成するための組織はどうあるべきかという議論は、少なくともプロジェクトチーム等でやってほしい。

それと似た話になるが、県と市の縄張り、これもおそらくこういう正規の会議では出てこない問題。日本人は、所属する組織が違うグループと一緒に仕事をすることがなかなかうまくできない民族で、必ず問題が起きてくる。本音の話を聞くとときにはちらほら聞こえてくるが、きちんとした課題として出てこない。これは逆に言うと、もうタブーが生まれているのではないかという気がする。つまり、まともなところでは議論できないが、みんなが気にしている。タブーがあると、今話した業務や組織の見直しはすごく難しくなる。だから、皆が感じている、正規のところに出せないものを、きちんと対象化、意識化、見える化することを同時に進めていく必要があるのではないか。県と市の縄張り争いや溝、ローテーションがうまくいかないことなど。法的にどうしても融合できない、事務を一括処理ができないものがおそらくあると思う。しかし、本当に手続きを変えられないか、あるいは、回り道する方法が行政的に本当はないのかということ、法務担当の方も含めて検討したほうがよいのではないか。やれないことはないが、面倒くさいから着手できていないことは結構多い。行政の法務の専門家に入ってもらえば、こういう方法があるよということがあるかもしれない。そういうことがあれば、県と市の業務の融合をもう一度見直せるのではないかという気がしている。

それから、3期に向けてデジタルAIの活用が、今回かなり例示的に挙がってきているので一安心した。オンライン、リモートでのサービスや非来館型サービスなど挙がっている。私は先輩たちから、図書館は利用者と直接顔を合わせてカウンター越しに本の貸し借りをするとき、心が通じるんだ、みたいなことをさんざん吹き込まれてきた世代なので、そういうことが重要だということも十分に理解しているし、それを求めてくる利用者もいる。しかし、自動貸出装置を

入れたら9割の利用者は自分で借りていく。図書館員が期待していた職員との接触を、利用者はそれほど期待していなかったのかもしれない。これも以前話したが、今後、職員と利用者の接触の機会が減少する状況が進むと、おそらく日本の図書館は二極化する。貸出業務がなくなると、職員はもうカウンターに出なくていいやと言って事務所に引き上げて楽になる。そして、どんどん定数を減らされて衰退していく図書館。もう1つは、貸出業務が楽になったから従来のレファレンス、インフォメーション、フロアワーク、あるいはラーニングコモンズでの多様なサービスなどに力を入れていく図書館。前者のためになる図書館が圧倒的に多くなると思う。だから、生き残っていくためには後者の図書館にならないといけない。利用者との接触については、例えば、日本では来館者は全体的に減ってきているが、最近の研究では、アメリカの図書館は来館者が増えている。一般的に、ネットが発達すると図書館の利用が減るのではないかと勝手な仮説を立てて仕方がないと議論している一方で、逆に利用者が増えている国もある。

それから、冒頭に予算の話が出たが、驚くことにアメリカでは市町村の図書館の予算は増えている。日本の図書館員の皆さんは、何となく日本と同じようなことが世界的に起きているのではないかと考えている方が結構多く、実は私もそう思っていたが、そうではない。だから、そういうことも含めて、ぜひ3期で非来館型をという話。

図書館は、利用者の利便性を高めてきた歴史がある。最初、貸出しはせず、書架もオープンではなかった。それを利用者の利便性を高めるため、貸出しを始めたことによって図書館内で本を読まなくてもよくなった。それから、いろいろな遠隔の貸出し業務を始めた。その延長線上で考えていくと、最終的には図書館に行かなくても必要な情報を手に入れられることになる。だから、最終的な到達点はそこではないかと思う。そうすると、図書館員、司書がどうやって高度な情報提供サービスをするのかということになっていく。これは以前にも話したが、司書がプロンプトエンジニアになり、素人の一般の方では引き出せない多様な情報をAIから引き出すこと。プロンプトの書き方で引き出せるものが変わってくるので、一般の方よりも情報に対する優位性を担保できる。この情報の優位性というところに図書館の存在意義があるので、ここが崩れてしまったら、おそらく図書館の存在意義がなくなってしまう。そこが重要なポイントになるのではないかと考えている。

【委員】

事務局から説明があった資料1の話。そろそろ3期のことも考えていく観点からすると、ここで挙げられているサービス指標は、私から見るとキーパフォーマンスインジケター、KPI的な要素が多いと思う。

もちろん図書館に携わっている皆様はよく理解をされていると思うが、やはり県民・市民の手前、KPIとキー・ゴール・インジケター(KGI)、最終目標とは切り分けてもよいという気持ちが今、結構強く出てきている。非常に大事な指標もあるが、一方で、それは何かの目標への一里塚のようなもので、それを達成したら終わりではないことも含めて、今は割とフラットにサービス指標を出しているような印象を持っている。これは絶対達成しなければいけないというか、根源的なことと、1つの指標として数値目標を設けていることは、3期に向けて少し階層をつける必要があると思っている。

それから、行政の中で図書館をどう位置付けていくかを考える。いただいた資料を見てびっくりした。千葉を例外とすると、資料費が全国で2番目ですごい。そうすると、そろそろ打って出ないとやばいかなと思う。会長や私など大学の職員は、研究1つするのに研究費の申請をするところからスタートといった暮らしぶりをしていて、予算は5年したら終わる。

次の予算を獲得しなければいけないので、行政の中の位置付けもプッシュ型にしていけないといけなく思っている。資料は準備しています、こういう相談にも物れますという以上に、こういう支援ができるのでやりませんかぐらいの話をしていくこともそろそろ考えていけなく、行政の中でこれだけの規模の図書館を維持することの意義をご理解いただくのはなかなか難しいかと思っている。

それから、貸出冊数等の話も出たが、基本的にはメディアに対する集中力の低下があると思っている。私はYouTubeをライバルだと思っているが、ライバルはもう既に大変なことになっている。5分超えたら誰も見ない。今のはやりは、ショートで1分半。1分半に全ての内容を入れて、詳しく見たい人は本編。本編は10分あったら見ない。本編は5分から10分未満、そんな世界になっていて、少し長いものは全部早送り。私も1.75倍速でずっと見ている。そうなっている状態で、情報を取得することは、より一層大事だということは間違いない。そんな中で、本を借りて読むことをどう捉えていくかを少し考えないといけなく。それこそこういう本がありますではなく、本の読み方を紹介したり、何分で読めば効率がよいかなどのことまで考えていけなく、他のメディアには対抗できないと思っている。

それから、先ほどの話にもAIが出てきた。AIと共存できるかどうかは大変なことで、私個人は非常に危惧している。高知県はAIと共存できる県であってほしいと個人的には思っている。

プロンプトエンジニアの話も出ていた。少し突っ込んで言うと、大変だとは思いますが、司書がプロンプトエンジニアになっていくだけでなく、一般ユーザーがプロンプトエンジニアになれるぐらいの、核になる図書館であってほしいと個人的には思っている。

AIは新しいグローバルズムで、現状の大規模言語モデルには全世界アンケート調査の結果が入っていて、日本語も含め、世界中の人がどう思っているかアンケートした平均値が出てくる。それに高知県、高知市というローカルが出てくるとすれば、それは高いレベルで考えをまとめないといけなく、地元のよさをアピールしなければいけないという意味でも、私はオーテピアにはそういう役割も出てくる気がしている。おそらく、そういう方向性があった上で資料がたくさんありますよと話をすると、単に資料がたくさんありますよと言うのでは、来館される方の集中力も違うのではという期待をしている。私が教育関係の人だからというのはあるかもしれないが。

少子化ということもあるので、高知県、高知市全体の、1人1人の情報獲得能力と情報発信能力を高めていける図書館であってほしい。

【委員】

最初に館長がいろいろ懸念を示されたが、確かにそうだと思う。

皆様の話を聞いて、改めて我々が評価基準と考えているものは、そもそも現状にマッチしているか、我々の目指す活動、行動を本当に正しく評価する基準であるかどうかから見直す必要

があると感じた。それから、新しいミッションを考えていくためには、組織の問題、それから、評価の指針と合築を生かした図書館の共同運営とは何かを考えないといけない。

予算に関しては、これから厳しい局面を迎えざるを得ないと思うが、新しい提案として我々ができること、こういう支援をするから予算をつけてくれないかという積極的な活動をしていくしかないと思う。図書館の生命線である読書のための図書館というだけでは、今後大きな変化を遂げていく社会への貢献ができるわけではないと思う。そのあたりは、オーテピアの活動の評価の指針を見直し、もう一度よく考えてみることに、数値目標の達成状況はどうしても大きくクローズアップされてしまうが、予期せぬ様々な社会的な変動や人口減少もあるので、数値を評価にどう結びつけていくかということもきちんと整理し直さないといけない。

全体としては非常にまとめて書かれており、できていることと課題がしっかり分けられている。課題の捉え方は基本的には正しいと思うが、今後、図書館活動を進め、社会貢献ができるためには、さらに新しいプロジェクトが必要ではないかという視点からも考えていく必要があると思う。

<事務局 議事2説明>

【委員】

外国人アンケートについて。日本語を母語としない方の対象者が3,000人で、回収見込みが300。関係団体へ協力依頼するという事になっている。多分、一番返ってこないだろうと思われるのは技能実習生。普通にアンケートをやっても彼らは答えてくれないだろうし、そもそも図書館を利用するという意識さえないかもしれない。技能実習生は一番数が多いし、このジャンルの人たちがいなくなると、高知はどうしようもなくなると思う。だから、協力を依頼する関係団体とよく話をして、彼らにとってプラスになることを図書館がやっていくという意思をはっきりと表し、そのために一緒にやってほしいと伝える。彼らが図書館を利用したらどんなメリットがあり、図書館が彼らにとってプラスになることをいかに生み出せるか。このアンケートの回答を基に実現させたいことをよく伝えた上で、彼らからもおぼろげな意見ではなく、こんなのだったら使ってみてもよいという要望を引き出す。あるいは、図書館の通常の業務ではないところも含めて、土日開いている公共施設は図書館ぐらいしかないという特性を最大限に生かしながらやっていく。さらに言えば、市民図書館は分館などもうまく使いながらやっていけばよいが、県立の場合は市町村立図書館とどうやって一緒に取組を進めていくかということがあるので、そこにつながるサービスをこの中から見い出していかなければいけないという視点をまず持っていただきたい。また、彼らからの本音、あるいは、こんなのだったら使ってみたいという意見を何とか引き出してほしいと思う。このアンケートは、本当に普通のアンケートではないと僕は思っている。

先ほどの人口減でいうと、図書館がどこまでできるかは分からないが、土日開いている図書館が他の部署の業務の一部を実施したらこんな形の展開ができますよということ。仮にオーテピアでできたことを少しダウンサイジングして、新しくやる気のある図書館にも始めてもらい、そこにオーテピアが最大限協力することで、外国人の受け入れ体制の一部を担うことができる

など。彼らに、高知に来てよかったと思われるサービスができる状況まで、何とか持っていくための第一歩としてのアンケートだと理解していただきたい。このスケジュールの中で、これは時間をかけてやってほしい。関係団体の人もよく話をし、どういう項目にするか。図書館ができそうなことを上手に利用していただいたら、こういったこともやってくれるのかともっと喜ばれますよといったことも含めて検討してもらえたらと思う。

AIの話が出ているが、対策としていろいろな方向性がある。AI、特に生成AIは、最近の数か月だけでも、ものすごく便利になり、答えが正しくなっている。図書館がAIを利用して、プラスあるいはマイナスになる影響にはどのようなものがあるか。問題点を図書館がどうやってカバーしていくのか。図書館にではなく、県民・市民にマイナスの影響がある部分をどうカバーしていくのかを整理した上で、先ほどの生成AIを使う。徹底的に使いこなせる能力ももちろん必要だと思うが、マイナス面を考えると、どんどんフェイクがうまくなっているところがある。フェイクをどう扱うのか、これに対して誰に聞いたらよいのかというときに、図書館ならある程度答えることができますよと言えるか。これは、フェイクがどのように作られていて、どのように調べたらある程度のところまで分かるか、知識と技術を持った職員を何人確保できるかにかかってくる。

以前、STAP 細胞はありますと言われたことがあった。その後、全く世の中から忘れられていたが、去年ハーバード大学が STAP 細胞の特許を取得して云々と言っていたので、やはりスタップ細胞はあったんだ、ということになった。日本は、やはりここでも失敗したというニュースがネット上を駆けめぐっており、友達の何人もがそれにまんまと乗ったのを見て、大丈夫かと思った。ただ、必ずしも嘘ではない。日本とアメリカの特許制度には違いがある。アメリカは、アイデア自体を特許として認めてくれる伝統があるから可能性はなくはない。だが、日本はできるということを実際に証明してみない限り絶対に認めてくれない。そこが分かっていたら、アイデアの部分でやったんだろうなと。そういうところを全部捨象してしまって、ハーバード大学が特許申請したということがネット上で分かると、ほら見たことかとまんまとのった人間が何人もいた。でも、これのようなものはまだかわいい方。生成AIやネット上でのフェイクがどんどんうまくなってくると、偏りがものすごく出てくる。OKという情報ばかりが次々届き、それは違うという情報はネットでは届かなくなってしまうことを十分に理解されていない人たちは、こんなにネット上に私のことを支持する情報が溢れかえっている、だから、私が今言っていることは絶対正しい、皆さんもっと聞いてくださいと大きな声でふれ回る。横から見ている人間からは馬鹿だと思われることさえも気がついていないのがまずいということ。だけど、それを今どこに聞いたらよいのか多分誰も分からない。そこで、図書館が全部はできないかもしれないが、ある程度はフェイクについての情報提供をしていく。聞いてもらったらフェイクの見破り方などもある程度レクチャーするし、情報をきちんと伝えるのが我々の仕事だから聞いてみてくださいと言えるかどうか、これからの社会の中ではかなり重要になってくると思う。振り回されるような偽情報に対抗できるのは高知県内で言えばここしかない。大学にそれをやってほしいと言っても、分野に分かれているから絶対できるわけがないというのが今思っていること。

明後日、県立図書館の職員向けの講座の中でも、在留外国人への対応やネット情報への対策

ができていますか、やる気がありますか、それができないのだったら県立が市町村立図書館をバックアップすると言っても、言葉だけが空回りしている状態になりませんかということを話そうと思っている。

情報リテラシーの向上関係の展開は、県内唯一の、ある意味、頭脳集団、技能集団であるオーテピアの司書が、この部分はしっかり担える、この部分を支えていくということをアピールできる大きな部分。今やっていることもさらに伸ばしていただければ非常にうれしい。

それから、ビジネス支援を分館・分室に広げていただいたり、市町村向けのビジネス支援サービスの研修をしたり、先ほど話に出てきた最近できつつある新しい市町村立図書館と一緒にこういった部分もやって、彼らが本当にそこで成果を上げてくれれば、図書館のイメージが変わってくるはず。図書館は仕事に使えるところ、我々にとって必須の機関だという意識を持ってもらうためには、ここまでいってほしいと思う。

それから、健康・安心・防災情報サービスで、専門機関から、選書やブックリストに対して感心したとの声があった。賛辞として最高だと思う。ただ一方で、一緒に選書はしていないのかとも少し思った。一緒に選書をしていたらこの賛辞は出てこないのではないのか。当然、司書の皆さんが一生懸命選書していることは理解した上でこれからのことを言うが、やはり最小の力で最大の成果を得ようとするのであれば、専門家や団体の皆さんの力をうまく利用しながら、我々が今、揃えておくべき資料を検討することも必要。他の県に比べれば豊かな、県立は1億円、市立は8,000万円の資料費があるので、専門機関などからの希望に沿えるようにするので、ぜひ置いてほしいものがあればどんどん言ってくださいということがもっと伝わり、そういったリクエストが次々出てくるようにしてほしいと思った。

アウトリーチサービスで、いくつか別の機関との新たなつながりが挙がっているが、これは味方づくりだと思う。図書館に逆風が吹いてきたときに、いやいやそれはちょっと困るよと言ってくれる人たちが外にどれぐらいいるかという問題だと思う。この数と、この声の大きさがしっかりあれば、図書館はそう簡単にはやられません。なぜ図書館が今まで簡単に人員や予算を削減されてきたかというと、味方を作っていないから。館の中のサービス、館の中の組織としてやることだけ一生懸命やります、喜んでもらいます、で終わってしまうと、味方が全然できず、誰にも反対されずに切られてしまう。今、味方づくりはできつつあると思う。こういったことをやって味方をつくるのが、県立・市立の図書館の将来にとってどれだけ大事かをもう1回腹に据えて、ぜひ取り組んでほしいと思う。

それから、学校については、味方づくりがどこまで腹に入っているか。小・中学校、高校は、オーテピアの将来の利用者を作ってくれるところ。だから、彼らに頑張ってもらわないといけないし、彼らが頑張れる環境を我々は作らなければいけない。先生たちは勉強グループ、例えば、国語部会みたいなものを作っていて、年に2、3回一緒に研究したり発表したりする機会を持っていたりするので、図書館と一緒にやりたいと思う部会に参加して、図書館が絡む方法を部会と一緒に考えていくことで、今まで以上に図書館の現場を担っている先生たちに、図書館を意識してもらい、あるいは使ってもらい。そういった努力をしておいたほうがよいと思う。

鳥取県の場合、市町村立図書館はどこまでそれができているかというと、できている館とできていない館はやはりある。90%以上の学校に司書はいるが、十分に活用されている市町村

とそうでない市町村とがはっきり分かれている。その辺りを何とかしたいと思う。高知でも小・中・高といかに組んで、我々にとっての将来の利用者を作ってもらうか。それは単に本を貸します、希望があれば講座やりますというレベルではないと思っている。

多文化サービスは先ほど少し触れたが、いろいろなことをやっていて結構だし、長崎の全国図書館大会の発表も非常にエポックメイキングな出来事でよかったと思う。技能実習生以外の日本語を母語としない人たちは従来の利用者層の延長だと思うが、技能実習生はそうではないと思う。そこは多文化サービスと言いながらも全く違うものぐらいに思って、アプローチの方法を考える必要があるし、技能実習生へのアプローチを図書館が一生懸命やって成果を挙げられるのであれば、それは高知県にとって多文化サービスの取組の大きな要素になると思う。

それから、大学等について。図書館以外の大学の部署との連携協力にあたっては、図書館も巻き込んだ調整が必要。ものすごく利にかなったことが資料に書いてあるが、1つだけ気になっていることがある。今はもう変わったのかもしれないが、大学の図書館の職員の方は、新しいことをやりたがらないという印象が強い。鳥取県でいろいろ仕掛けた時に、一番最後まで抵抗し、ネックになったのが、大学の図書館の職員の方。館長や学長を引きずり込むのは割と簡単にできるが、最後に抵抗するのは図書館職員だったので、そこだけが気になった。

【委員】

3期計画の説明の一番最初に人口減少、過疎化の話があった。時々テレビにも出ているので名前を知っている方がいるかもしれないが、日本総研の研究員で藻谷浩介という人がいる。その藻谷さんの研究では、過疎だと言うが、居住可能地域に対する人口密度で比較すると、欧米の先進国であっても、日本より基本的には過疎で、確かスイスと鳥取県は同じぐらいだという話。藻谷さんに言わせると、過疎、過疎と日本人が勝手に思い込んでいる。この失われた30年のデフレも同じで、勝手に思い込んで振り回されているのではないか。先ほどの話のようにネット情報だけでは振り回されてしまうが、最終的なエビデンスによって物事を判断するよりどころとして図書館があるのではないかと思う。

私たちはすぐに過疎でサービスが大変だと言うが、例えば、アメリカは広大なので図書館に行くのはとんでもない話。日本はポストの数ほど図書館があり、歩いていけるとところに図書館があるという話をずっとしてきた。日本の場合、図書館に行こうという気になるのは、移動時間が大体15分から20分位と言われていて、距離ではなく時間。アメリカではもう少し長くて、おそらく30分から1時間ぐらいは当たり前。日常的なスーパーの買い出しにも車で3、40分かかる。だから、過疎とは何なんだということ。そういうあたりも、図書館サービスをするときに、そもそもどうなんだろうという気構えを持って考える必要があるのではないか。

進捗管理のシートについては、そろそろ業務の見直しをしましょうということを毎回話している。例えば、行政支援サービスは、行政の中に味方を作っていくためにもものすごく重要。行政支援サービスや議員に対するサービスには、図書館の生き残り策としての側面もある。成果が上がれば上がるほど、行政内部や議員の中に図書館を理解してくれる味方が増えていく。やればやるほど味方を増やせて予算獲得にもつながるので、戦略的にやらなければいけない。

多文化サービスもおそらく担当がいらっしゃると思う。大学でサービス論を教える時に、学生がこういう質問をよくする。先生、児童サービスってレファレンスはやるんですか。障害者サービスってレファレンスは必要なんですか。

つまり大学の授業だと、レファレンスサービスはレファレンスサービス、障害者サービスは障害者サービス、児童サービスは児童サービスと教える。何となくおはなし会をやって、絵本を選んでみたいなのが児童サービスで、全然違う授業でレファレンスサービスをやる。そうすると、大人の人に対するサービスとしてレファレンスというイメージがあるけれど、レファレンスサービスは、高齢者サービスでやるんですか、障害者サービスでやるんですか、児童サービスでやるんですかとなる。

つまり、個別の業務が担当者とその利用者に結びついている。これは現場でもそういう勘違いがあって、行政サービスの担当者は行政サービスとしてやろうと思うが、実は行政サービスの中身を考えると、福祉のセクションもあれば、地域の経済振興、商工、観光もある。一方、図書館側からすれば、課題解決型のビジネス支援の担当者が行かないといけませんが、行政支援サービスの担当者が行ったりしている。本来、サービスはマトリックス。多文化サービスでも障害者サービスでも児童サービスでもレファレンスはある。だから、外国人も、市役所の公務員も、ビジネス支援サービスの対象として支援をしなければいけない。

一般のビジネスマンか経営者が図書館に来て、ビジネス関係のレファレンスをしていく対応についてはよく考えるが、実際は日本語が話せない外国人に対してのビジネス支援をしなくてはいけなし、市役所の商工観光の職員と一緒に商店街の会長に会いに行かなければならないということになると、本当はこの辺のマトリックスの整理をしなければいけない。それぞれの担当が一緒に行くのか、それとも総括的な部分は、例えば、行政支援サービス担当の総括などが話をつけに行き、中身のサービスについては医療関係、ビジネス支援などの内容の情報と関連のある担当者が出かけていく。道筋は行政支援サービスの担当がつけるが、中身についてはそれぞれの担当が出かけていくといったマトリックスを考えていく必要があるのではないかな。これは、ほとんどの図書館できちんとできていない。

だからそういう意味では、繰り返し言う高知モデルで、積極的に取り組んでいくことが必要ではないかと思っている。

【委員】

先ほども言ったが、1期と2期で10年。10年で何か1つのことをやったとするならば、一般論では、次は同じことはもっと低予算でということになるだろう。行政では効率化の話が出てくると思っている。オーテピアは多分、1期はいろいろな新基軸が打ち出され、2期にそれを拡大するところまでは絵として非常によかったと思うが、3期もそれを拡大するということだと、少し厳しい話も出るのではないかと危惧している。

もともとオーテピアは、結構無理筋から始まっている。その無理筋とは合築のことだし、もう1つは、高知県・高知市の財政力からは考えられないような予算規模になっていることで、非常にエネルギーをかけて構築されている。それが1期と2期で10年なので、これを生かしてさらに進めていきますということだと、なかなか厳しい意見が出るのではないかな。

なので、3期にあたっては、図書館関係者から、見たことも聞いたこともないことをやっているといった話が出てこない、ちょっとオーテピアらしくないかなというのが私の個人的な意見。

幸いなことに、高知県民・高知市民は非常に新しいものが好き、そして、日本一が大好きという、本当にありがたい県民性・市民性をお持ち。先陣を切ってやっている間は非常に快く温かく見守ってくださるので、3期ももう一段、二段上からの目線でいかないといけないと私は考えている。図書館の役割は何ですかといったことについて果敢にチャレンジしてきたことは事実で、先ほどの話のように、解決しなければいけない問題もたくさんある。その中でさらに、また一段、高知は違うところに行こうとしていると思ってもらわないと、さらなる進展はないと思っている。

それからアンケート。これはこれで素晴らしいが、私個人としては1つ、非常に聞いていただきたいことがある。それは、高知に移住された方がこのオーテピアをどう思っているか。高知に移住された方に図書館があることが非常にプラスになったという話も、いろいろなところから出てきているので、どんなところがよいのか噂を聞いてきて、結局どうだったのかといった話も、できたらぜひ伺ってほしいと思う。その中にヒントがあるのかな。特に、移住された方は、わざわざ移って来られた方なので、当然、高知に魅力がないとなかなか移って来ていただけないので、その中で図書館が果たす役割がどのくらいなのかは見ておきたいと思った。

その一方で、アップルコンピューターを作ったスティーブ・ジョブズの有名な話がある。スティーブ・ジョブズは、アンケート調査やマーケティング調査をするというと怒って、時間の無駄だと言ったそう。理由は、見たことも聞いたこともないものを作るために、そのことについて意見を聞いても仕方がないだろうということ。iPhoneが出る前の話ではあるが、そういう逸話もあるぐらいで、逆に言えば、なかなかアンケートに出てこない水準で、新しい提案を組み立てていく必要があるだろうというのが私の意見。

そんな中、今回拝見した資料4には、いろいろな先鞭とか先進的な話もあるので、より一層集約して、新しいものを加えていけたらよいと思っている。

【委員】

次期の計画に向けキックオフミーティングが開かれたということで、資料を見ていろいろ思うところはある。アンケートもそうだが、一番大事なのは、まず現状、例えば、市町村図書館が一体どうなっているか。その地区の住民のこれからの人口の変遷を考えると、今のあり方を継続すべきかどうかといったあたりからきちんとした資料を集める必要があるのではないかと。基本構想を練る段階で、全国と同じ規模の自治体の図書館の平均値に対して、高知県の市町村図書館がどのくらいの位置にあるかの調査を行ったはず。そのような形で、まずその実情の確認、調査、それから、図書館を取り巻く環境の変化、特に、人口減や過疎が一番問題だが、それが一体どんな形で進展していくのかまで少し織り込んだ現況調査をしてみる必要があると思う。それから具体的な案を作成していくのが一番確実ではないかと思う。

それから、あらゆるものがスマートシュリンクの方向へ向かわざるを得ない。これはもう図書館がどうこうすることではなく、逆にそのスマートシュリンクの中で好きなことをやってみた

らというのは難しいかもしれないが、スマートシュリンクというもうどうしようもない枠組みがあると、逆にアイデアを出しやすい面もあるというぐらいに考えないと、新しいサービスも思いつかないのではないかと思う。

それから、特に生成AIの進歩に伴うフェイク情報の問題が、あらゆる人の生活にかかってくるのは間違いない。正しい情報は何かという、これは非常に難しい問題ではあるが、少なくとも事実を確認する手段を各人が知っておく必要は最低限あるし、最後には、何とか頼れる場所を知っておく必要があるだろう。頼られる方になる可能性が高いのは、やはり高知ではオーテピア高知図書館だと思う。具体的には、司書の方々の能力に関わる面もあるが、これからの図書館運営やサービスのためには、事実を確認する手段は必要だと思う。

さらに言えば、スマートシュリンクの方向に行政が向かうとして、その行政が目指すのは、サービスまでシュリンクさせることではないはず。シュリンクする方向に向かいながらサービスは落とさずに、逆に言えば、広げたいのが本音だと思うし、そうあるべきだと思う。

そのために図書館は何ができるかということ、情報の扱いを合理化することができる。図書館に関われば、例えば、行政サービスの合理化、情報提供、情報収集、資料収集という合理化ができるということである。シュリンクするとしても、そこがしっかりしていれば、サービスの低下などにはつながらないという提案をいろいろなところへしていくべきだと思うし、それだけのことができる実力をオーテピア高知図書館は今までで身につけてきたと思っている。そうすれば、予算獲得の面、それから、何かあったときの支持者・応援者の獲得の面でも、大いに役立つと思う。そういう観点から次の計画を考えていただけたらよいのではないか。抽象的な言い方をすれば、いろいろな面はシュリンクするが、その活動をシュリンクさせることはない。そういうサービス、そういう行政を目指すためにも、図書館がいかに重要かということをいろいろな活動を通じて認めていただくこと、それが示せる計画を作ることが大事。

とりわけ震災も懸念される中で、行政がシュリンクしていき、人口も減ってしまうが、子どもも大人も心までシュリンクしてしまうようではとてももたない。そうではなく、事実は事実として認めながらも、何とかシュリンクに対抗できる力をつけるために図書館を活用する、知識を得る、正しい情報を知るというだけではなく、図書館を通じていろいろなことを学べる、例えば、友達と一緒に来ることによって対人関係を維持する方法を見つける、図書館に自分から出向いていろいろな人との交流を図るなど、図書館がそういう場でもあることを体験することが大事だと思う。

居場所というか、図書館という建物自体の広範囲な活用も含めて、特に、オーテピア高知図書館のいろいろな実力を各方面に訴えて、スマートシュリンクという方向に貢献できることが示せる計画を何とか作り上げたい。

【委員】

また生成AIの話になるが、オーテピアになる前の高知県立図書館、高知市民図書館の時代の司書の人数は何人だったか。県立の方は2011年の正規職員の司書が11名で今は定数が23名。

鳥取県立も、私が館長だったときは正規職員の司書が9名、今は17名。全国で増えているか

と言えば増えてない。正規職員の司書はどちらかというと減らされる方。オーテピアや鳥取県立がなぜ増えているのか。オーテピアはまだ伸び盛りだからというのもあると思うが、やはり図書館をどう見てどう動かしているか。そして、その中心にあるのは、情報が本当でしっかりしているかどうか。

例えば、ビジネス支援は、ビジネスに関係する本をちらちらと並べて、パソコンを置いてビジネス支援でございますとしても、それに正規職員の司書がぜひとも必要ですと言えるかという和多分言えない。そんなことでは通用しない。必要とされるのは、ビジネス支援をある程度専門でやって、ビジネスの業界である程度の人脈が作れ、調べることにしてもある程度のテクニックが身につく、何か質問や相談をされたときに的確に人をつないだり、次に何をしたらよいかについての的確なアドバイスをくれるところ。鳥取はそうだが、例えば、金融機関へ起業の相談に行くと、図書館にもいろいろ資料があるから相談されてはいかがですかということを、金融機関の担当者が言ってくれる。交代しても構わないので正規の職員が一定の年限関わり、一定程度の能力と人脈をきちんと持っていてこそ維持できるサービスと言えるはずだし、その結果、ここが開業しました、ここが業種転換しましたという成果が実際に出てくる。オーテピアもやっているが、それを漫画にして、こんなことができますということまで言って初めて、正規職員の司書が必要だという説得力が生まれる。ビジネス支援などは分かりやすいが、これからは、生成AIを中心としたネットから取ることができる情報について、いかに上手にその中から必要な情報を選び出すか、いかにその中から害になりそうな情報を取り除くことができるかが必要になってくる。この2つの能力を、正規の司書の中の全員とまでは言わないが、一定数が持っていて対応できるようになっていることが、これから先、正規職員の司書が必要だと言ってもらえる大きな材料になると思う。繰り返しになるが、そういう職員の育成ができる組織はもうここしかない。他の県などは必ずしもそういう状態ではなくて、司書が減らされたりしている。そういう流れの中に入ったら、そう簡単には抜けられない。だから、今まさにそういうことが重要になってきていて、社会の中でもフェイクが問題になり、生成AIの能力が非常に高くなってきて、結構的確な答えをくれるようになってきた今の段階で、それが使える職員をどれぐらい育てているか、今後に向けて育てようとしているか。

3期について言えば、今までの何とかサービスをやりますではなく、情報そのものをオーテピアでは確実に得ることができるし、マイナスを防ぐことができますという状況に到達することが1つのステップになるのではないかと思う。

【委員】

私もプロンプトエンジニアとしての資質は、早急に身につけるべきだと思う。ネットで調べると、日本の場合はまだプロンプトエンジニアの認定試験はなく、専門的な講座みたいなものがちらほら出てきた段階。これからおそらくプロンプトエンジニアの認定試験なども出てくると思うので、早めに資格を取り、地域に対して図書館にそういう資質のある職員がいることをアピールする必要があると思う。プロンプトエンジニアが当たり前になる前に、図書館の司書がその役割を果たしていることを1歩先にアナウンスする。物事はやはりタイミングが大切。もし、そういうイメージを県民・市民の一定程度の人に与えることができれば、もう大成功だと思う。実

際に皆さんもご存じだと思うが、専門のプロンプトを書いて、条件式や箇条書きで範囲指定、条件をきちんと与えるとレポートみたいなものが返ってくる。一般の県民・市民はまだこういったことは知らないが、それを目の当たりにすれば、とても素人ではこんな情報を引き出せないということが分かる。図書館のネット上に動画で流すといったことをいち早く行い、マスコミにも報道してもらおう。議会でも評判になるような形を仕組む。そうすることが図書館の存在価値を高めるアピールとなる。図書館関係者は「やるべきことやってればいいでしょ」という気質があるが、自分が管理職になってみると、いかにそのPR、アピールが重要かということが分かった。

政治家の人たちは、実際に中身があるに越したことはないが、中身よりは見え方の部分がとても重要で、最近には特に劇場型になってきている。これがもう1つのポイントだと思う。

それから、もう1つはフィジカルAI。フィジカルAIは、AIとロボットが一緒になったもの。最後の10フィート問題というのがあって、大きい倉庫は自動化されているが、最後にトラックに積むところが自動化できない。それは条件がいろいろ違うから、定型ロボットではなく人型ロボットの方がよいのではないかということになってきている。テスラは、ロボット1台200万円で近々売り出すと言っている。200万円は会計年度任用職員1人分の年俸ぐらい。だけどロボットは24時間働けるので、人間の3倍働く。そうすると、会計年度任用職員に支払うコストの3分の1でロボットを導入できるという計算にもなる。

私は図書館界に40年以上いるが、長くいてよいこともある。それは、技術を導入したときの経過が分かること。コンピューターを導入しようと言ったときに図書館界はもう大反対。非人間的になるとか言って。でも、もう今、コンピューターなしでは図書館業務は回らないと思う。また、オープン書架にすると、貸出しを始めるときにも大反対。その繰り返し。もちろんそのときの技術そのものが稚拙だということもあるだろうが、技術が持っている可能性に着目しない。

ライト兄弟の飛行機が飛んだときに、飛行機に人や物を載せたら便利ではないかと言った人がいたらしい。あんな20メートルしか飛べないものに、そんなことできるわけじゃないかと、周りの人はみんな笑った。目の前にあるものの状態と、そのものが持っている本質的な可能性は別。

今の進歩の度合いからすると、もう人型ロボットなどが入ってくると思う。それから、生成AIの利用についても、私の知り合いのベンチャーの経営者はクライアントと打合せする前に、AIに打合せの内容をチェックさせている。

例えば、前川恒雄先生がいた日野の図書館はいち早くコンピューターを入れた。その頃のコンピューターは本当にひどくて、今からすれば話にならず、ハードディスクが80メガバイトしかない。80テラバイトではなく80メガバイト。80メガバイトしかないハードディスクが1台3億円ぐらいしていた時代。だが、市役所より前に図書館に入っている。浦安もそうだった。図書館は、最新技術を取り入れる場所でもあった。苦労してそれを実用化していくということがあって、最初は格闘しなければいけないが、いち早く入れたところはそれだけPRのバリューがある。みんなが入れたら全然、珍しくも何ともないので、現場は大変だけど先ほど話した、PRすることはすごく重要だと思う。だから、現場からすると、とんでもない技術を導入して大変だったのは

よく分かるが、トータルでの効果がある。

高知と政治家は日本で初めてが大好きなので、そういうことを繰り返していくこともとても重要で、それが予算に結びついてくるから、そのあたりもぜひ考えてほしい。

スケジュールの右下の検討中の欄にある、図書館等複合施設「オーテピア」による中心市街地活性化への寄与の効果測定に関わる調査・研究、これもずっと課題。そろそろこういう調査について評価の専門家に来てもらって、研修を受けるなり相談してはどうだろう。

それから、先ほど組織の見直しの話をしたが、いろいろな組織がある。そのときのメリット・デメリットはこうだよということについても、組織学を研究している人に来てもらって、職員研修を行うなどしては。実は、浦安でグループ制を導入する前に、能率協会で組織論を専門にしている人に来てもらって、職員全員で組織のあり方についての研修を受けた。ぜひそれをしていただきたい。

もう1つ、ラーニングコモンズについて。オーテピアは残念ながら少し狭い。これからラーニングコモンズはすごく重要になってくる。アメリカのニューヨークにミッドマンハッタンという貸出し専門の巨大図書館があった。そこが、書架を少し撤去してラーニングコモンズを作ったりしている。これは大きな流れで、ラーニングコモンズをもう少し空間的に拡張すること、それをやれと言ってるのではないが、検討することも必要なのではないかと思う。

だから、先ほど話した組織の見直しなどにかかることについて、もし可能であれば、委員全員で職員の方の聞き取りをしたい。この委員会に出席しているのはほんの一部の方だと思う。本音の話を聞きたいので、可能であればお願いしたい。

【委員】

いろいろな意見が出たが、事務局の方は参考にして図書館運営を進めていただくようお願いしたい。

最後になるが、議事3その他について事務局から報告等あればお願いします。

【事務局】

議事3

今後のスケジュール

10月頃、令和7年度の第2回サービス計画推進委員会の開催を予定している。